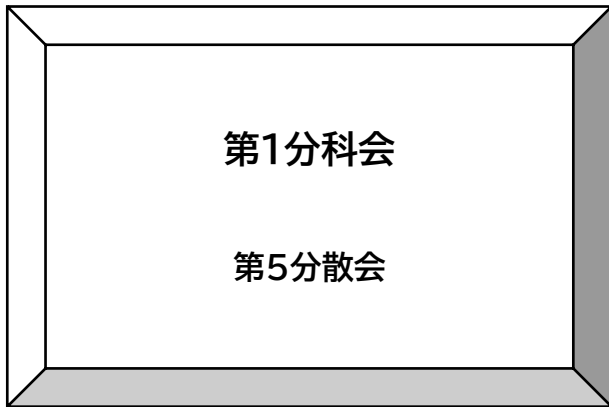




I はじめに

分科会基調提案では、協力者から自身の経験をもとに、分科会をとおして、部落問題をはじめとするさまざまな人権問題の解決をめざす教育をどう創造しているかということを大事にしながら、事実と実践に基づく討論を進めていきたいことを呼びかけ、討論の柱を確認し、報告・討論に入った。

II 報告及び質疑討論の概要

－報告1－㉑

「子どもの育ちと集団づくり・学校・園・所づくり」

～友だちとつながりながら～（高知県人教）

－主な質疑と意見－

福岡 職員間で情報共有する時間や、場面、形態等の工夫があれば教えて欲しい。

報告者 保育の合間に話をする。また、職員室で振り返りや個別の子どもの様子を昼の10分程度で共有している。延長保育では、職員が入れ替わるため、保育内容を午後の職員に引き継ぐ。職員間で大切に時間をとっている。

福岡 小学校との研修等、縦の繋がりについて教えて欲しい。

報告者 小学校とは毎年夏に研修をしている。園・所で大切にしていることを小学校の教職員にも知ってもらうため、今年は保育士体験を行った。実際に子どもの姿を感じ、遊びのなかで学んでいることを体験してもらう。子どもの学びがどのようにつながっていくのか、どうつなげていくのかという点から連携を取るため、同じ視点をもつということも気をつけている。

福岡 報告にあったのは解放保育所か。解放保育についての研修が今でも行われているのか。

高知 香南市は複数の市町村が合併してできた市。いくつかの町村には、被差別部落の要求活動をおして同和保育の実践を積みあげてきた経緯がある。香南市になってからは、職員研修で人権講座を実施している。報告の園は同和保育所ではなく、新興住宅地にある。経済的には比較的豊かな地域で

あるが、核家族や共稼ぎ家庭もあり、追い立てられている子どもたちもいる。

三重 Aのマイナスの姿に対する周りの反応はどうであったか。クラスにつけたい3つの力を達成するために、どのような活動を考えていたのか。また、今、取り組んでいることについて教えて欲しい。

報告者 Aが関わりたいという思いで友だちのところに行くと思いがぶつかり合い、いざこざが起きってしまうことがあった。Aのよさを友だちに伝えることで、Aのことをもっと知ってもらいたい。友だちから認められたことで、自分の遊びを友だちに教える姿も見られるようになった。自信をもったことを伝えるときは、とてもやさしいことばで穏やかに伝えている。そんな姿がもっと増えてほしいと思い、関わっている。

神奈川 報告にあったようなCとの関わりがあると、お互いよい方に変わるかもしれないという期待やねらいがあつて、場の設定をしたのか。この場に限らず、ほかのときでも何か意図をもって、設定したり関わりをもてるような場をつくったりしたというようなことがあれば、紹介してもらいたい。

報告者 4歳児になると友だちと一緒に遊びたいという思いが出てくる。遊びのコーナーは4～5人が遊べるような広さにしている。その中で友だちとやり取りができる。ひとりで遊びたい子もいるが、周りの友だちの様子が見えるような環境を心がけている。友だちから刺激をもらったり、友だちの独り言も聞こえるような距離だったりすると「あ、それ、私もやってみたい」というようなきっかけにもなると考えている。グループも大切だが、クラス全体でできるような集団遊びも設定している。普段関わりがない友だちとも関わるができる。いざこざが起きたときにこそチャンスだと思うように心がけて保育している。

－報告1－㉒

「自分のことが知りたい！」

～乳幼児期からの性教育の実践をとおして～

（大分県人教）

－主な質疑と意見－

兵庫 私が勤めている中学校では中二で妊婦体験をする。子どもたちは、就学前や小学校低学年で体験した「命の学習」の内容をよく覚えている。職場の子どもたちを中心に、子どもたちの視点から義務教育へつなげる実践があれば教えて欲しい。

報告者 今年度から性教育に取り組むなかで、保育の中にはたくさん「いのち」や「体」に関係する場面が日常的にある。改めて考えてみると、そこに視点がなかなか向いてなかったなという気づきがあった。性教育の学びを小学校につなげていくというところが、まだまだできていない。園での取り組

みは、小学校の養護教諭に話している段階。質問をいただいて、「そうやって子どもたちの心の中に乳幼児期の経験や学びが残っていて、小・中学校での学びへと積み重なっていくのか。」と思うと同時に、自分たちの課題でもあると感じた。小学校ともさらに連携しながらやっていきたい。

大阪 性教育については本当に必要性を感じている。報告を聞き、より一層早い段階で取り組む必要性を感じた。人権擁護委員から、性被害から子どもたちを守るために性教育を実践してはどうかと申し出があった校区の小学校では、全校で性教育について学習を始めた。一、二年生では、プライベートゾーンについての実践が多かった。国語の教科書に、家の中で男の子が裸で遊んでいるシーンが出てきた。さまざまな場面で、性教育とつながる場面があると感じた。中学校でもどのように性教育を積み重ねていくかを考えた。妊婦体験の実践を聞かせてもらったので、そのようなことを取り入れながらやっていきたいと感じた。質問として、小学校での性教育実践の具体例があれば聞かせてほしい。

報告者 まだ私たちも取り組みをはじめたばかりで、地域で取り組んだり繋げたりするところまではできていない。今後、近隣の小学校を含め、市内のさまざまなところと繋がりをもちながら、子どもたちが自分を守る学びをつくっていききたい。

福岡 「優生思想につながるよ」と指摘されたところを詳しく聞きたい。あわせて、この学びが人権や人の見方へと広がっていくと思う。大分では、ジェンダーも含めて性教育との関連や視点等がどのようになっているのか聞きたい。

大分 特別感のような考え方が優生思想につながるのではないかと。だからこそ、Nさんは「偶然だけど、それであなたが生まれたんだ。」という見方が大事だと伝えてくれたと理解している。能力主義や受験競争のなかで、子どもたちは偏った価値観を持ってしまう。「さまざまな人がいるんだよ、たままだよ。」という捉え方は、大事だ。制服について、現在も見直そうという動きはある。男性のスカートという選択肢については丁寧に受け止める必要がある。どのような見直しがされているかを細かく見ていかないといけない。少しデザインが変わっただけで、実はその男女別が残っているという見直しもありえるので、気を付けて進めている。

鳥取 性教育をすすめる際「まだ少し遠ざけたい」「性教育についてよく知らない」という保護者もいると思う。性教育の実践に賛成をしてくれた保護者が多かったという報告であったが、保護者向けの研修内容や方法について教えてほしい。

報告者 保護者がどのように思うのかが一番気になった。話をするうちに、どの年代の保護者も、性教育は今のうちにやっていきたいという思いが伝わってきた。段階を追って知識として学びを深めていくイメージで教育していくとよいとアドバイス

をもらったので、まずは親子で自分の体について学び、その後、保護者向けにセクシャリティの話をした。

－報告1－⑱

思い込みをせず、粘り強く向き合う

(福岡県同教)

－主な質疑と意見－

福岡 児童支援が家庭訪問に行くなどしたことからAが変わったというあたりを詳しく知りたい。児童支援が家庭訪問に行った際、担任としてどのように連携をとっていたのか。また、6年生で部落問題学習が入ってくると思うが、これまで全人同研のなかで、カリキュラムがしっかりしていることが大事と言われてきた。報告者の小学校ではどのように学習の積み上げをしているのか教えて欲しい。

滋賀 先ほどの質問に加えて。教師の姿で子どもは変わると報告があった。また、スタートが第一と考え、保護者と連絡を取るように頑張ったと話されていた。本気の気持ち伝わるのだと感じた。Bについても聞きたい。

報告者 本校は毎朝、欠席連絡のない家庭への電話連絡や家庭訪問から始めている。さまざまな理由によって不登校傾向にある子どもがたくさんいる。Aもその一人。支援加配が中心となり、毎朝家庭訪問に行っている。一緒に登校できる時もあるし、お昼前ぐらいだったら行けるかもという返答があることもあり、担任にAの様子を伝えている。家庭訪問では、家庭の状況も確認している。担任と共通理解を図りながら進めている。

カリキュラムについて、人権部落問題学習にしっかり取り組んでいかなければならないと考えており、中学校区として進めている。昨年度、中学校区で学年部会を開き、学年で同じ題材で学習し、中学校につなげている。今年度は、低学年、中学年、高学年、中学校で目標を定めて取り組んでいる。Bにも協力を得ながら、一緒に学習づくりをしていけたらと思っている。カリキュラムがあればよいというものではなく、教師が学んで、しっかり地域の思いを聞いたうえで学習をつくっていかなければいけない。Bは結婚して地域で暮らすようになった。「こんなに言われるの？」というほどの差別に出会ったと話していた。「本当に結婚差別や、その住んでいるだけでダメと言われるのか」と理解できない状況だったが、Bから「教育が最後の砦」と言われた。教える側の私たちが正しく知ったうえで子どもたちに話をしないと、誤った考え方を伝えてしまうという怖さも感じた。Bの孫が隣のクラスにいる。被差別部落の出身であることを知っている子どもが目の前にいるということに、迫ってくる感覚を覚え、身近な問題に感じた。Bから「悲しむのではなくて、打ち勝って欲しい。」と言われた。私自身が勉強しなくてはいけない。子どもたちには、差別に出会

ったときに、なかまを大切にし、友だちを守って欲しい。

大阪 「心の時間」の取り組みについて、具体的に知りたい。また、「寝た子を起すな論」について話し合った際の子もたちの発言について知りたい。

報告者 「心の時間」は水曜の朝の時間に全校で取り組んでいる。相手の気持ちや考え方を理解する能力や自分のことを伝えたり、相手の言葉をうまく受け取ったりする力をつけることが目的である。いじめや差別は許さないということを伝え、教え、考えるのはもちろん、命の大切さや心と体の学習、「子どもつながりプログラム」や食育等、人権につながるさまざまな内容について計画し、養護教諭と相談しながら、発達段階に応じた取り組みを進めている。北九州市作成の資料をつかった学習計画を立てている。「寝た子を起すな」についてはその資料動画を視聴した。部落差別という言葉にピンとくる子どもは少なかったが、「なぜ住む場所がちがうからといって、差別を受けなくてはいけないんだろう」「差別をする意味がわからない」という考えの子どもが多かった。一方で「知らないうちに自分の心にも差別の気持ちがあるのではないか」「自分が差別をしてしまっていることに気づかずに過ごしていることも、差別が続いていることになるのではないか」という意見も出てきた。振り返りでは、「自分の心にある差別を無視してはいけない」「家族がもしも嫌なこと言われたら…」と、自分ごととして考えている子どももいた。「自分の住んでいる地域がもしそうだったら、将来どうしよう」「差別はダメだと、親に話したい」等、素直な言葉で多くの感想があった。

福岡 北九州市では資料も作成しているなか、なぜタブーと感じたのか。そう思っていた自分を、今、どのように整理されたのか聞かせてほしい。

報告者 人権研修等で、部落差別という言葉は知っていた。「ネットで検索をすると、アクセス数が増えて、記事が上に来ってしまう。調べてはいけない」「ちょっとした発言が差別につながる」というように受け止め、発言に気をつけないと、差別していると周囲に受け止められるかもしれないと思った。私のなかにも「あのあたりは治安が悪い」といった気持ちがあったが、差別とは思わずにいた。そういうところから、部落差別という言葉がとても重い言葉だと感じていた。部落差別について「聞いてはいけない」「してはいけない」という感覚があった。今、学ばなかで一步踏み込んで学習をしていればと考えている。本校だから部落差別を受けている子どもがいるのではなくて、被差別部落がなくても、しんどい思いをしている子どもがいるかもしれないといったことに気がつかなかった。もっと早くに、正しく勉強したり、被差別部落の人の話に出会ったりしていれば、自分の感覚は、もう少し子どもたちに向けられたのかと思う。部落差別に限らず、さまざまな差別があるなと研修を受ける度にハッとする。自分の心のなかのどこかにある気持ちが、人権

問題とつながっていたのではないかと感じるようになった。子どもたちに伝えるときに、出会った人たちの経験や思いをのせて話ができるようになった。勉強させてもらったことを、子どもたちにかえしていきたいと考えるようになった。

－総括討論(1日め)－

奈良 数年前から性教育に力を入れている。一番多感で、性に興味をもつ時期だからこそ、中学校で性教育をすべきだと考えている。性に関する調査から、中一の冬休み頃から性暴力を受けている生徒がいると分かり、早く性教育を実践しておけばよかったと後悔した。今年は1年生で性教育を実践し、避妊まで扱った。「love distance」というコンドームのTVCMを視聴し、避妊の必要性を教えている。性病も、正しい知識がないことが関連している。中学生の早い時期に教えていけないといけない。教科書としたのは河野美代子さんの著書「SEX&ourBODY」。帯には「大人の『まだ早い』は、いつだって遅すぎる」と書いており、その言葉に尽きる。性教育はまだ早いという保護者がいた場合、「児童生徒は、高学年から性犯罪のターゲットになる。早いうちに教えておかななくてはならない。子どもが自分自身を守るためにも必要なことだ」と言えば、ほとんどの保護者が納得するだろう。小さい頃から積み上げ、中学校でこそ取り組むべきだと考えている。

福岡 私たちの姿、立ち振る舞い、言葉、感性が、子どもたちに見えていると、改めて感じた。先生の一言が、子どもたちを変えていくという話を思い出した。今日の報告にも、そのような内容がたくさんあった。私たち自身が問われている。もう1つ、今日のキーワードになっている「言葉や伝える力をどうするか」という問題。私たちの仕事は、見守り、受け止めながら自分の気持ちを言えるよう、言葉や術を教えることではないか。少し待ってみること。生活背景や思いを感じ取れば、子どもたちは変わっていくのではないかな。

福岡 長行小学校では、児童支援を担当していた。今日は、受け持っていた2人の成長の話をさせてもらいたい。Aは精神的に幼く、学力も厳しい状況であった。妹と弟の世話をしなくてはならない日によく休んでいた。その後、保護者が離婚。祖母の家に転居した。さらに、母親が法に触れる行為をし、家を空けることになった。Aが落ち着くはずもない。登校しても、クラスを抜け出し、空き教室で過ごす日が続いた。粘り強く関わっていくなかで、子ども同士のつながりができ、Aも教室にいたことが当たり前になってきた。私を訪ねてきた時に、専門学校へ進学すること、就職したら給料を家族のために使いたいということ等を話してくれた。前向きに生きていこうとするその決意に胸が熱くなった。

Bは、小学校入学前から施設で生活をしていた。施設の行事等に顔を出すなかで、しだいに心を開

き、教室に居場所もできた。

長行小学校には、さまざまな苦勞をしている子どもがいる。背景にある部落差別や貧困等をひしひしと感じ、無力感が襲ってくることもあった。しかし、子どもたちは厳しい現実を跳ね返し、選んだ道を生きていこうと力を発揮している。子どもたちの主体性、意志、考えを大切にしながら支援し続ける。それが子どもたちの生きていく力につながると考えている。

福岡 私が住んでいる地域でも、保育所の3歳児で人権啓発を行っている。さまざまなテーマで保護者に啓発しており、勉強になっている。改めて就学前教育の役割はすごいと感じた。

児童支援の経験を思い出した。家庭訪問には、何度も行った。姉を担当していたが、よく遅刻をしていた。「もう少し遅刻しないようにしましょう」と話していた。児童支援になり、妹を迎えに行った時、家のなかを見ると、クーラーがなかった。子どもたちは、風呂場や玄関タイルの上で寝ていた。厳しい生活のなかで学校に来ていたという背景を知ると、「よく学校に来たね」と声をかけたかったと思っている。自分たちの子どもの見方、考え方が、子どもたちの身につく。一人ひとりの生活背景を見ながらしっかり向き合っていくことで、あたたかいクラスができると思った。

福岡 報告者にアドバイスさせてもらったのは、「聞いてもらえる心地よさ」を子どもが実感していることに自信をもってほしいということ。子どももなかなか社会と言いながら、子育て世代の親たちは忙しい。追い立てる保育、教育はダメだと言いながら、子どもたちは、じっくりと話を聞いてもらえていない。私の恩師が「子どもに言って聞かすのに、今日話したからと言って、明日からしないとはならない。今度するまでしないよ」と話してくれたのが、心に響いている。ごめんなさいが言えないときも、一日時間をかけたら言えるようになった。そういうことを繰り返し、卒園する頃にはすぐに言えるようになった。「聞いてもらえる心地よさ」が、保育現場にはたくさんある。今の子どもたちは、私見てコールをどんどん送ってくる。「眼差しの同和教育」と言われたことを、先輩保育士として現場に伝えている。3本めの報告で、Aが自己発揮できたのは、報告者が気持ちを向け、信頼関係ができたからだろう。よい出会いをすると豊かになる。それが教育の真髄だろう。

協力者 性教育は命にかかわる問題。乳幼児期から育てていかなければいけない。報告者のまなざしをキャッチした子どもたちの姿や、被差別部落と出会い、自身が変容したという話もあった。差別しているのは大人たちであるという現実があるように思う。子どもたちも学ぶなかで差別意識が生まれてくるかもしれないが、子どもたちは、大人をよく見ている。私たちは言葉がけや意識、振る舞いも含めて、常に自分を問い直す必要がある。

－報告1－②

街友の輪を広げよう

(大阪府人連)

－主な質疑と意見－

大阪 子どもや保護者の価値観を変えるために活動を始めたとのことだったが、活動の意義や変容のポイントについて教えていただきたい。

福岡 さまざまな差別事象があったとあるが、具体的にどのようなことがあったのか。また、校区の実情として同和教育に関すること、支部や校区の実態について教えていただきたい。2点めに、「にじわタイム」の実践で、こだわって取り組んだこと、よかったことがあれば教えてほしい。3点めは、地域の人々は、差別解消に向けてどのような活動をされているのか、また、学校でどのような論議をしたのか知りたい。4点めとして、報告者の「弱い部分を出したくない、できないと思われたくない」という価値観が具体的にどのように変容されていったのか教えて欲しい。

報告者 子どもたちが地域の人との出会いをとおして「一緒にやってみたい」という思いに変わっていったことが、「街友」の一番の取り組み。子どもと一緒に、地域の人や同僚と話し合うなかで今のカタチになった。地域の人々の思いや取り組みは、地域のため、人のためだと聞き、「あの人たちとつながりがあるのかな」「高齢者は、買い物をどうしているのだろう」と、相手の立場で考えようとする姿につながった。ある子どもが障がい者を属性で判断していたが、取り組みのなかで、〇〇さんというような見方に変わっていった。相手のことを知るからこそ、差別や偏見に出会った時に行動できる力につなげていきたい。保護者の価値観を揺さぶる機会は十分につくることができなかったが、家庭科のエプロン作りや調理実習等の際に参加を呼びかけ、出会いの場をつくったつもりだ。保護者の変容までは見ることができなかった。自分の一番の変容として、価値観が広がったというところだと捉えている。これまで、自分のなかに「こうしなければ」という枠があったり、子どもたちの「やってみたい」という願いに対して、無理だと遮ってきたりしていた。地域の人から「子どもたちがやってみたいと思っていることだったら何でもやってみたらいいやん。そのためだったら、いくらでも協力するで」と言われたことや、「受け止める人、一緒に解決する人が必要」と言われた時に、言われたことを大切にしていることこそが、差別を解消することにつながると考えていくようになった。地域の人々の被差別体験や家族に被差別部落にルーツがあることを打ち明けた話等、今まで、部落問題が遠いものとして実感がなかったが、こんなに身近に差別があり、当事者ばかりに差別をなくす行動をさせてはいけないと強く思った。簡単に「しんどかったですね」言えるものではないと強く

感じた。一緒に考えていくことがカウンター側の立場を増やし、差別を無くすのだと考えるようになったのが、自分の一番の変容だと思っている。

高知 Aが変わるきっかけとなった地域との関わりがあれば教えてほしい。

報告者 学校外で子どもの居場所づくりに取り組んでいる人がいる。今回は、「街友」の活動をとおして、デイサービス利用者のみなさんと出会った。「放課後に遊びに来て」と言ってくれ、放課後にランドセルを背負ってデイサービスに顔を出す子どももいた。取り組みをとおして、自分たちで出会いの場を広げているのではないかと考えている。

奈良 Aを含む子どもたち、保護者、地域はもちろん、報告者にも変容が見られる取り組みだと感じた「にじわタイム」でたくさん出会いの場をつくられたが、学びを価値観や行動変容につなげるため、出会い以外に取り組んだことを教えて欲しい。また、Aの保護者が子どもに本音を語るようになったのは、素敵なことだと思う。報告者との関わりがきっかけになったのだろうと考えているが、保護者と関わる時に意識したことを教えて欲しい。

報告者 クラスミーティングは、毎月、取り組んだことを振り返る活動である。また、フリースペースを用意し、そこには何を書いてもよいことにしていた。悩み事や学級の状態等、子どもたちの声をクラスミーティングの議題にあげて、話し合う場を設けた。また、例えば、自分が療育園に通っていることを友だちに打ち明けてみたいと相談があったときには、保護者と話をし、その子が表現できる場を構えた。想いを聴くことで、友だちのがんばりを改めて知ることもあった。クラスミーティングは、子どもたちの実態を見て、教職員と学年間で話し合いながら取り組んだ。Aの保護者と積極的に話し、寄り添うことを意識した。でまあ、何度も電話や直接話をしたことで、しんどさ等を話してくれるようになった。積み重ねがあったからだと思う。

滋賀 しんどい部分、弱い部分を見せたくないという気持ちは、私ももっていた。報告者の変わってきた内容がすごいと思った。

福岡 特別支援学級と、通常学級。子どもたちが一緒に過ごし、生きていく場所は原学級である。それが、いつの間にか何々学級や何々教室ができ、共に生きていく、ちがいを越えて生きていくというところが薄れている。そのあたりについて聞きたい。

報告者 学習室については、学校全体で子どもたちに伝えている。子どもはそれを理解したうえで、関わる事ができていると思う。学習においては、子どもの実態や授業形態に応じてその都度、話し合いをし、巻き込んで受け止める集団づくりを大切にしている。

－報告1－②

「おとなが子どもを守るために必要だと思うこと」

～2024(令和6)年能登半島地震 発災から今までとこれから～

(石川県人教)

－主な質疑と意見－

大分 子どもたちがPR活動に取り組もうと動き出した時に、どうしても活動に参加できないといった子どもがいたかもしれない。その際、どういった支援、声かけ等をしたのか、また、先日も大きな地震があったが、子どもたちの様子について聞きたい。

報告者 何かしようとした時に「そんな気持ちになれない」という子どもはいた。今もいる。無理強いはいらない。タイミングを見ることを心がけている。大阪でPR活動をすると思っただけで尻込みしてしまい、はじめはなかなか出てこなかった。しかし、友だちの誘いから「やってみようかな」と思ったのだろう。こんなときだから、大人も引きこもりたい気持ちはある。結果的には、全員が休まず参加し、頑張っていた。

大阪 本当に厳しい現状での子どもの取り組みがわかった。経験を踏まえ、どういったことを準備し、何をしなくてはいいかということ学んだ。持ち帰って、取り組み進めていきたい。取り組んでいくなかで、報告者自身が一番大事にされたことについて教えて欲しい。

報告者 今回に限らず大事にしているのは自立である。子どもたちが社会に出て、よりよい生活ができるようにと常々思っている。今回の自然災害を、ある意味、手段と捉え、自分たちが置かれている現状や目の前の課題を何とか克服していこうと前向きに考えるようにした。今この子たちにできること、輪島ではない地域でいかに自分たちの表現できるかを考え、意見表明をすること大切にしている。

福岡 未曾有の大災害に出会われたなか、報告者がこの経験をこれからの教育に生かして行きたい考えたこと、この経験をして大きく生き方が変えられた部分について教えて欲しい。

報告者 子どもたちは、今、中学三年生。今後、義務教育から離れ、自分の道を選ぶことは、自立につながる。子どもたちのなかにできてしまっている枠や「指示待ち」「前例踏襲」という姿は、大人にも責任があるのではないかと考えている。先ほどの報告にもあったが、そこに暮らして行くひとりの人として、自分だけではなく、みんなで「この現状どうする?」と考えていくことが大切。

兵庫 報告にあった実践は生きたキャリア教育そのものだ。不登校の生徒たちが教室に帰ってきたという報告を聞き、特別な状況のなかで、本来学校のあるべき姿のヒントがあるのではないかと考えた。子どもたちの進路の見通しについて、差し支えない程度で教えてほしい。

報告者 それぞれ家族と話をし、この先を見通し

て一生懸命考えている。オンラインも使って顔を合わせようということを実践してきた。自分の意見を言いやすい学級づくりが大事だと思う。

大阪 子どもたちのメンタルケアをどのようにされたのか。子どもたちの心のライフラインが学校であると思った。

報告者 メンタルケアが一番心配しているところ。表には出ないが、何十年も経った後に思い出するという事例も聞いている。スクールカウンセラーの面談が定期的に入っている。広く浅く、人と接することも必要だろう。見た目だけで判断せず「しんどいだろうな」等、想像することが大事。

－総括討論(2日め)－

福岡 大阪の実践は、討議の柱の1つに関連がある。全同教で学んだことを実践しようとしたとき、先輩から「地域や子どもの実態がちがうのに、同じことをするのは乱暴ではないか。」と言われた。最初は意味が分からなかった。しかし、子どもを取り巻く差別の現実を明らかにし、校区の被差別部落の歴史や今まで大切にされてきたこと、地域の願いを受け止めたうえで実践しないと、子どもたちの顔が下がる授業になるのではないかと考えた。目の前の子どもたちの実態を踏まえたうえで取り組むことが大事だと思った。2つ目の報告は、討議の柱の憲法理念に基づき、子どもの権利を保障する人権教育が保育学校教育全般のなかで確立され、継承されているかを考え、明らかにしようというところと重なる。2015年あたりから九州北部で災害が起こっている。久留米で教員として生きて行くうえで、筑後川の災害は忘れてはいけない。日頃から防災教育をきちんとし、子どもの命を大事にする。何を学んでいくのか、自分にできることは何かということを考えていかないといけない。防災教育を実施する前に、どう動くのか、どうしていかなくてはならないかを考えていくことが、ひとりの人間として大事だと改めて思った。今日の報告を聴き、その心を強くした。

石川 周りの先生と連携して、どのように学校、授業をつくっていくのか報告者の考えやヒントをもらいたい。

福岡 報告中に涙される姿を見て、なぜ泣いているのだろうと思った。「自分はもうちょっとやれたな」と思って泣いているのか、それとも差別の現実に関自分が起こされて、涙をしたのか。自分たちがどの立ち位置にいるのかが大事だと思う。

兵庫 福岡大会で「差別はあかんっていうけど、いじめはあかんっていうけど、なくなれへんじゃないですか？先生がなんでもっと言えないんですか」「差別をすることは恥ずかしいことだと、もっと強く言ってください」と泣きながら訴えた方がいました。その言葉を忘れません。子どもの命と暮らしと笑顔は守られていることが続くと願いたい。感情的になることもあると思うが、これからも差別をなくすために頑張ってほしい。

福岡 報告者の涙に関して、とても大事だと思っている。私たちはさまざまな涙に会い、そこからさまざまなことを考える。昨日の報告者の涙は、寄り添う感性だと思う。流した涙はすぐ乾く。同情と哀れみはすぐに差別に変化する。怒りの涙です。涙を流させる側、差別する側に自分がいるのなら、涙を流さなくていいようにするのが私だという覚悟が必要。

福岡 報告者の姿が人権同和教育と出会う前の自分と重なった。たくさん先輩や部落のおじいちゃんおばあちゃんと話すなかで、差別をしているのは自分だと気づいた。私もかわいそうと泣いていた。子どもに差別をしない、なくすひとりとしてのものの見方や考え方をどう教えていくか、なかまの先生と一緒に勉強している。学び続けていきたい。

報告者 自分の差別意識について振り返る時間があつた。自分のなかに、「当たり前」「普通はこう」という基準で人を判断するところがあつたと気づかされた。自分自身の差別意識に気づかないと、差別解消はできないと考えた。なかまが差別にあつたときに「おかしいだろう」といっしょに考えるなかまづくりをしていくことが、この学校でできることだと思う。テーマを踏まえて改めて集団づくりを見直さないといけないと自分の不甲斐無さに涙した部分があつた。逃げずに毎日子どもと関わったということが去年の自分に一番できたことだと思う。

報告者 「かわいそう」という気持ちがあつたかも知れない。なぜ差別している人がいるのだろうか？なぜ差別が残っているのだろうか？等、さまざまなことを、昨日、この場で考えていると涙が出てしまった。本当の自分を見つけることはすごく勇気がいるし、怖いと思うが、課題が見えたり、子どもにしてみたいことが分かったりする。このような場で話をさせてもらうたびに、新しいことに気づき、考えに甘さがあるなと思う。怒りの涙に変えていかなければならないというお話は絶対そうだと思う。慰めとか寄り添いの涙とは自分は思っていなかったが、そう取られないように勉強をし、「それは恥ずかしいことですよ。それは差別ですよ」と言える人になりたいと今改めて思う。

石川 課題をクリアしていこうとする時は、それぞれの意見がある。大事なものは、自分の思いを思い切って言えること。助け合いながら進んでいくことが大事だと思う。ただ、今回はさまざまな取り組みのなかで先生方からアドバイスをいただいたり、多くの方々に支えられたりした。

鳥取 2日間でキーワードがたくさん出てきたと思う。今、子どもたちも多様化している。子どもたちの心をなんとかしないといけないと思っている。地域の人たちに学校に入ってもらい、知り合うことで子どもたちの世界が広がるし、知らないものも得られると思う。先ほど教職員の連携という話があつたが、先生は、枠に縛られることが多くない

ですか？学校はこうじゃないといけない、先生はこうあるべきだと。子どもたちに「無理」と言うなと言いながら、先生たちも「無理」と思っているところがある。世の中は変わってきている。学校も変わっていかなくてはいけないと思うし、枠をとっぱらって何ができるのか、もっと語り合えるとよいと思う。報告を聞いて、思い切ってさまざまなことができるのはすごくいいと感じた。ただ、会議が非常に多く、なかなか先生と話をする時間がもてないのが現状。私は学校のなかで通信を出している。自分の考えを先生方に伝えていくということに取り組んでいる。性教育のことも枠ということも、何より子どもたちの心を豊かにするために頑張っていきたいと思った。

福岡 特別支援教育のもとで子どもたちが分断されている。深刻だと思う。この子たちが大きくなったときのことをとても心配している。学力や能力で、子どもたちが分けられている。私たちはそれを正当化していないか。本来の学校とは、どのようなものなのかと思った。

トラブルが大事だと言われる。本当にそうだと思う。先輩方は「非行は宝だ」と言われた。子どもたちが表現している姿こそが差別の現実であり、教育の現実だということをきっちり受け止めて、そこから始めよう。という意味だ。問題行動という言葉方をするが、困った行動ではなく、行動問題だ。行動の奥にある思いや願いをつかみ、行動を変えていくために、思いを知り、つなぎ、ぶつかり合いをとおして解決していくのだと思う。こちらが仕組みや仕掛けをつくって集団づくり、なかまづくりをしようと思えば思うほど、必ずぶつかりが起る。トラブルは、みんなのことで、自分はどこにいるか、どのように受け止めるかとつながっていくと思う。だから、トラブルが起きたとき、一つ一つを大事にしながらつないでいき、みんなで理解し合う。「そんな思いがあったんだ」「だからこうやってやったんだね。でも、その行為はよかったの？」と、きちんと分けながら伝えていく。わたしは不登校のことを聞きながら、「そこに居場所を見つけたんだね」「そこに自分の役割を見つけたんだね。」といった居場所がある学校・クラスをつくっていけば、子どもたちが一緒に差別をなくしていくなかまになるのだろうと思っている。

福岡 どのレポートにもあったが、人と出会いが本当に人生を左右することがあるのだと思った。子どもたちにとって先生方との出会いがやっぱり一番だと思う。子どもたちがたくさんの人と触れ合えるような教育がなされているところがよいと思った。私も若い時に会ったムラのお母さんたちに強くて美しい生き様を見せていただいた。

高知 今、大学で人権教育論の3コマを担当し、同和教育の授業をしている。毎回、大学生にアンケートをとっている。「同和教育についてどれくらい勉強してきましたか？」といった質問に対して「しっかり出来ている」と回答した学生は 1 割から 2

割・「まあまあできた」という学生が 2 割から 3 割。「ほとんど出来ていない」が 4 割から 5 割。そのような状況のなかでわたしがやっているのは同和教育の歴史や差別に立ち向かい、立ち上がってきた人たちのこと。そして、同和教育とはどのようなものかという大きな視点で講座をしている。「この講座を受けてよかった」という感想のほか、「全然知らなかった」「もう一回学び直しができてよかった」「自分を見つめ直すことができた」「同和教育以外の差別問題も興味を持った」という感想もある。同じ中学校区の小学校で、地区のあるなしによって同じ教材が扱えないという報告があったが、そのような状況で同和教育を扱うことに対する温度差がある。どれだけ先生が熱もできているかによって、学ぶ側の子どもにどれだけこう残っているのかがちがってくる。就学前から高校まで、人権問題を扱う時には、学ぶ側の子どもたちの心にしっかり残る実践をしていかないと、大人になって「そんなこと勉強したかな？」となる。それぞれの学びの段階で、心に響く実践をする必要がある。カリキュラムのなかにもしっかりと位置づけることが大切だ。

大阪 先ほど教職員集団というキーワードが出た。今の私の課題でもあり、振り返るキーワードでもあると思った。昨年転勤したが、1年めから人権教育の担当となった。どういう地域か、どういう教職員集団かも分からないまま人権を推進していく立場になった。わたしは「子どもたちにこうしたい」という思いがあるが、先生たちの思いについて話し合うことができなかった。仲は悪くないが、学校という場所を離れると、全員が他人のようで、相談できる人もいないような、つながりに欠ける集団に見えた。わたしはどうやってつなげていくことができるのかと必死に考えている。働き方改革の影響もあり、話す機会がない。子どもたちには「つながりをもたせたい」「出会いをさせたい」という想いはそれぞれがもっているが、そのためには出会うことが大切だ。子どもたち同士がつながり、自分の想いを話せるようにするために、何ができるのかと考える。その一方で、わたしたちはどうだと考えることがある。わたしが1年めに勤務していた学校は、すごくあたたかかった。その学校は、いわゆる被差別部落があった。子どもたちも教職員も一緒になって頑張らないといけないという思いもっていたからこそ、相談できたり、つながれたりできたと思った。子どもたちだけじゃなくて、わたしたち教職員も今チームになるためには安心できる環境をつくり、話ができるようにしなければならないと思った。

奈良 来てよかったと思った理由の一つが、性教育の実践があったことだ。自分の子どもが年長だが、女の子から抱きつかれることがあった。本当に嫌だったということではなかったようだが、女の子の母親が「抱きついてはいけないよ」と話すと、「仲よしという気持ちを表現しただけ」と、シュンと

しまったという出来事があった。相手の母親と会う機会があり、「性教育を、どうしていいか」「先生にも相談してみようか」と話していたので、今回の報告のことを伝えたいと思っている。保護者との連携や性教育といった点で保護者の想いも含めて報告を聞いた。お母さんとの連携という話が比較的多いと感じる一方で、お父さんとの連携は？と感じた。わたし自身も、家庭に連絡するときには、お母さんに連絡をしているが、お父さんと繋がらなかったことで、かえってお母さんに負担をかけてしまっていないかと反省することがある。お父さんに連絡をすると「ガツンと言います」という返事があることがある。男性だったら「力づくで」というところも性教育と関わってくる。今の職場では、隣のクラスを女性の先生が担任をしているが、女性の先生だと反抗し、男性のわたしが話すときは静かに聞くという子どもの姿から、その子の家庭が見えてくる。これも性教育に関わる。啓発していくときに、性被害の問題で被害者となるのは、多くが子どもや女性だと思う。成人男性にもしっかり届けるという観点から、保護者とひとくくりせず、父親を意識し、工夫して啓発されたのではないかと考えた。さまざまな家庭の在り方があるなかで、しっかり支えていってもらえるような啓発の仕方や伝え方を考えていかなければならない。つながるために、わたしは自分のことをたくさん話すようにしている。自己開示をすることでつながってくれる人できたり、連携が取れたりすると思う。教師自身が子どもに自己開示を示すことが大事だと思った。